



Title	書陵部所蔵『資賢集』の成立
Author(s)	三村, 晃功
Citation	語文. 1981, 38, p. 39-48
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/68677">https://hdl.handle.net/11094/68677</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 書陵部所蔵『資賢集』の成立

## 三 村 晃 功

誌は次のとくである。<sup>(1)</sup>

「從三位源有賢男。按察使から権大納言に至り、養和二（一一八二）出家。鄧曲・笛・和琴をよくし、後白河院近臣として活躍したため、治承三年（一一七九）<sup>(アヤ)</sup>年清盛のクーデターでは解官され丹波に追放された」（『私家集大成2』の解題）源資賢（一一一三）一八八）に、家集の存することは周知の事実に属するが、その資賢の名を冠した私撰集が宮内庁書陵部に所蔵されている。すなわち、『資賢集』（一五五・三九）が当該書で、本集はつとに、「中世私撰集解題（その二）」（『和歌文学研究』第十五号、昭和38・7）で、

橋本不美男・八嶋正治の両氏によつて紹介され、このたびは『図書叢刊 資賢集 遺塵和歌集』（昭和52・3）として、詳細な解題と上下句索引を付して翻刻、刊行されて、容易に利用することが可能になつた。

と同時に『資賢集』の内容についても、同書は詳細な調査結果を報告しており、同書の『資賢集』の研究に資する役割ははかり知れないものがある。そこで、橋本・八嶋両氏の御研究によつて明白になつた成果に導かれて、『資賢集』に言及するに、まず、本集の書

宮内庁書陵部蔵。袋綴三冊。二七・三×一九・五種。表紙は金茶色鳥子紙。題簽「資賢集上（中・下）」。端作は題簽と同一であるが、上巻のみ「按察使大納言資賢朝臣撰集」とある。近世初期写。本文用紙は楮紙。上巻は墨付七十三枚、中巻同じ七十三枚、下巻は六十八枚である。一面十行、一首は一行書きであるが、各冊、巻末近くなると、行間の補入歌が目立つ。三冊共、一丁オ、並に最終丁オに「阿波國文庫」の印記を持つ。すなわち、旧阿波国文庫蔵。

収載歌数は、歌を欠落して歌題のみの部分や、行間の補入歌も算入すれば、春四五七首、夏二三七首（以上上巻）、秋五四三首、冬二〇二首（以上中巻）、雜三五三首、恋三六四首（以上下巻）で、総数二一五六首。出典資料としては、「『明題和歌全集』、『古今和歌六帖』及び、俊惠・頼政・好忠の各家集を主要な出典として」おり、「この五集で、2114首、全体の98%を占めている」。「成立は、ほぼ『明題和歌全集』成立時点から孤本である本書の書写された江戸初期迄の間となる。当部蔵本は一見原本とも思えるが、（中略）原本とも思われる徵証を多く見出すことが出来、（中略）原本と見えた場合、何度もかの編纂を終えた中書本形態と推定され、写本と見

た場合は、書写者自身が出典を知り、それを手許に置いて書き入れた形態の本と見られる。前者の場合、成立は江戸初期となり、後者の場合は、極限は室町中期迄引き上げられよう。」（『図書叢書』

資賢集 遺塵和歌集』の「『資賢集』解題」）

このように、『資賢集』についての基礎的研究は、橋本・八嶋の両氏によつてほぼ完全になされ、『資賢集』についての問題はほぼ明らめられた感が強い。ところが、最近、本集の出典資料とされてゐる『明題和歌全集』の成立について検討してゐたところ、『明題和歌全集』の基幹となつた類題歌集『題林愚抄』を究明することができ、『資賢集』も『題林愚抄』に依拠して成つた私撰集ではないか、との臆測をもつて至つた。そこで、このたび、『資賢集』を精査した結果、『資賢集』の最大の出典源は、実は、『明題和歌全集』ではなくて、『題林愚抄』である、との結論に達したのである。

かかる次第で、本稿は、『資賢集』の最大の出典源の闡明をとおして、『資賢集』の成立の問題に言及した拙い考察にしかすぎないが、大方の御叱正を賜わりたいと思う。

## 二

さて、『資賢集』が原拠資料から採録されたのではなく、類題歌集から採歌されていることは、

(1) 天津空霞へたてゝ久堅の岩戸のせきをはるや（ゆらん）

（為定・五）

(2) 風ふけは岸のはかし葉そよ／＼と紅葉なからぬ山川そなき

（曾禰好忠・一三一四）

の二首がいみじくも示唆している。なぜなら、(1)は、『新後拾遺集』

の巻頭歌たる為定の

(3) 天つそら霞へだてゝ久かたの雲居はるかに春や立つらむ

（春上・為定・一）

(4) 明け渡る空にしられて久かたの岩戸の閂の春や越ゆらむ

（春上・為藤・一）

の下句が合体してできた歌であり、(2)も、『詞花集』収載の惟宗隆

(5) 風ふけば櫛の枯葉のそよ／＼と云合せつゝいつか散る覽

（冬・隆頬・一四四）

の上句と、『千載集』収載の後三条内大臣（公教）の

(6) くれてゆく秋をば水やさそあらん紅葉流れぬ山川ぞなき

（秋下・後三条内大臣・三七九）

の下句が合成した結果できた歌であるからだ。このように、(1)と(2)の歌は各々別種の歌集に収載をみる詠歌の上句と下句が合成されてできた歌で、かかる現象は、原拠資料から採録する際には絶対生じえない不祥事である。にもかかわらず、『資賢集』がかかる不可解な詠歌を収載しているのは、(3)と(4)、(5)と(6)の歌を連続して掲載する歌集から採歌したためであろう。その歌集が類題歌集『題林愚抄』と『明題和歌全集』であるが、残念ながら、両類題歌集とも当該歌を連続して掲げてゐるので、いずれの類題歌集からの抄出歌であるかは明白にしえない。この点、「『資賢集』解題」<sup>(4)</sup>すでに指摘されている、一四四六と一七七六の

(7) へはては又あすしらぬ世をたのむかなつもらんはての命はかり

（基頬・一四四六）

(8)さゝかにのしるしもいさやいかならんみたならてはくる人もなし  
(蜘蛛・俊頬あそん・一七七六)  
の二首も全く同様の事情にある。

そこで、「資賢集」と両題類歌集に共通する歌の本文異同について検討してみると、次の表(1)のとおり結果が得られる。

番号	本文異同
五一四	○月 ×花
八三九	○風ふけ(吹)は ×吹風に
一〇一七	○むしのこゑ ×蟻(きりきりす) ○有とみしはも ×ありし計も
一二一六	

表  
1

この表(1)によつて、『資質集』の和歌本文が一致するものは『題林愚抄』であることが知られると同時に、『題林愚抄』と『明題和歌全集』とが近似関係にあることも知られよう。

まず、一〇一七と一一一六の  
(9) 夜さむとは思わぬねやのむし、こゑかへてきてそねをのみは  
なく 夜友 (虫声近床・為遠卿・一〇一七)

(10)日にそへて霜かれ行は葛のはの有とみしはもえこそ恨みね

二首のうち、10は『続古今集』収載の俊惠の詠だが、この歌の第

四句は『続古今集』でも『資賢集』でも、「ありし計も」とあるの、『資賢集』の編者が書写者の誤記であろう。また、(9)は両類題

歌集の集付によると、「康暦二内廿首」の由だが、この歌の第三句

は、下句との関連からみれば、たとえば、「風雅集」収載の為兼の歌、「庭のむしは鳴きとまりぬる雨の夜のかべに音する蟻かな」(秋中・五五四)からも知られるように、「蟻(きりきりきりす)」の方が適切な措辞と判断されようから、これまた、『資賢集』の編者の誤記と推定されよう。

ところが 五一四と八三九の  
(1)月とみて、夜もやこえん夕暮のまかきの山にさけるうの花

(伊見院・五一四)

さの萩のはもをのれそよきて秋をしるらん  
(まかきの萩をよめる・為遠・八三九)

(12) 風ふけばはいまやまかきの萩のはもをのれそよきて秋をしるらん  
(まかきの萩をよめる・為遠・八三九)  
の二首は趣が異なるといわねばならない。まず、(12)は『続千載集』

収載の伏見院の詠で、同集は「夕卯花を」の詞書を付しているが、この詞書からも明白なように、この歌の趣向の面白さは、「まかき

の山にさけるうの花】を「月」に見立てたところに存するので、(1)の初句は「月とみて」の措辞でなければ不都合であろう。この点

『明題和歌全集』は「花とみて」とあるので、ここは『題林愚抄』からの採歌を示唆するであろう。次に、(2)は両類題歌集の集付によれば、「応安三内御会」歌だが、この歌の初句は「風ふけ(吹)は」でも「吹風に」でも歌意の上からは問題はないであろう。しかし、『資賢集』の本文が一致をみるのは『明題和歌全集』ではなく、『題林愚抄』の措辞であるから、これも『題林愚抄』に依拠した痕跡を残しているのである。

」ここに、まず、『資賢集』の依拠した類題歌集は、『明題和歌全集』ではなくて、『題林愚抄』であることが示唆されるのである。

次に、「『資賛集』解題」が「明題を出典とする」と曰かれる歌でも、かなり作者が明題と異っている」として疑義を提出している。作者表記の問題について検討しよう。両類題歌集のいずれかから抄出されたと推定される詠歌の作者表記の異同について、当面の問題に限って表示したのが表(2)である。<sup>(5)</sup>

(16) 岩間より落くる滝の白糸は結はて身をもすゝかりけり  
(17) わかなみたそよ又何と萩のはにあきかせふかは先こほる  
（千載集・六）

(宝治百首・八二二)  
（つまこひの秋のをしかの泪より結ひやそめしのへのしら露

（延文百首・九五）  
久月を待ゆみはりとしも云事は山のはさして  
いるにそ有ける  
（大和物語・一〇八二）

(2)庵結ふ秋の山田のひたすらにいとへやこれはばかりそめの世そ  
(玉葉集・一七〇四)  
ゆ遙なるいく草まくら結ひてがそのしたひものとけんとすらん

番号	作 者 異 同
一七六	○今出川隆義 ×今出川院近衛
五二二	○よみんしらす △欠落
六六五	○後宇多院 ×後嵯峨院
六八一	○藤原成方 ×(藤原)盛方(朝臣)
八二三	○ためつねの卿 ×為家
九五二	○さねとし(実俊) ×実信
一〇八二	○源順
一七〇四	○宣方 ×(從三位)為子
一〇一四	○としさだ ×信定
○○○○○○○○○○	
××○○××○△×	
×××××××△×	
××/○××○××	
資賢集	
題林愚抄	
明題和 歌全集	
原拋資料	

(2表)

ちなみに、表(2)の作者異同に関する歌とその原拠資料を列挙すれば、次のようになる。

(13) 吉野河こほりとけゆく岩なみのはやくも朝はるかせそふく

(藤葉集・一七六)

(14) 昔よりけふのみあれに葵草かけてそたのむ神のこゝろを

(堀川百首・五一)

但過にけり軒の罪はのこれとも雲にをくれぬ夕たちの雨

(新後拾遺集・六六五)

そこで、『資賢集』は『題林愚抄』に依拠して撰集されているという視点から、「『資賢集』解題」で出典不明としているうち、(2)天河うきつのみに彦星の妻むかへ舟今やこくらし

(藤教仲・七三四)

浮しつみ世をうみ渡る海士を舟行ゑもしらぬ身に社有けれ

(寄舟述懐・伏見院・一四六九)

(3)まことかとましをし返しとふほとの人の隙もなき契りかな

(忍契恋・今上御製・一八五六)

の三首と、『宝治百首』を出典としている、

ひとりねはなかきならひの秋のよをあかしかねてやしかの鳴ら

(夜鹿・中納言資季・九五九)

の計四首に言及すると、この四首は、『明題和歌全集』には収載されず、『題林愚抄』にのみ収載されていることが知られるので、ここに、『題林愚抄』が『資賢集』の出典資料になつてていることが推断できるのである。となると、「『資賢集』解題」で『六百番歌合』を出典としている、

煥行あはんちきりもしらすしのすゝきほのみし野へにまよひぬる

(尋恋・家隆・一八八〇)

哉

の歌も、『明題和歌全集』にも収載を見るが、やはり『題林愚抄』からの抄出歌とみなさねばなるまい。

また、『資賢集』の一〇八の

初秋ふかきまかきは霜のいろなから老せぬものとほふしら菊

(籬をよめる・一品法親王覚助・一〇八)

の歌は『続千載集』収載歌だが、この歌は、『題林愚抄』では「菊

霜」と「籬菊」の歌題の例歌として二箇所に掲載をみているのに、『明題和歌全集』では「菊霜」の例歌としてのみ収録されているので、『資賢集』がこの歌に「籬菊」の題を付しているのは、『題林愚抄』の歌題を採録した痕跡を残すものにほかなりま。

以上、和歌本文、作者表記、歌題表記、その他の観点から、『題林愚抄』と『明題和歌全集』とを比較検討した結果、『資賢集』の出典資料としては『明題和歌全集』は適切でなく、『題林愚抄』が正確な出典資料であることが明瞭になつたであろう。

### 三

『資賢集』の最大の出典源が『題林愚抄』となると、『資賢集』五五八の「兼宗朝臣」の注記のみで、歌を欠落している箇所には、(3)めつらしきはつねなれとも郭公あかぬなこりはうらみかれけり(6)

(題林愚抄・初郭公)の歌があつたと推定されよう。これで『資賢集』収載歌の全歌が知られるので、次に『資賢集』収載歌の出典一覧表を作成すれば、表

(3)のごとくなる。(7)

出典資料	歌数	後拾遺集	一〇首
題林愚抄	一三一首	重之集	八首
古今六帖	三九七首	赤染衛門集	三首
俊惠集	一〇四集	行宗集	二首
頼政集	一四六首	兼盛集	二首
好忠集	六〇集	長明集	二首
詠千首和歌			一首



まがないほどである。次いで、六歌仙から『古今六帖』収載歌人の歌数が目立つが、この中には、人麿・有間皇子・家持などの万葉歌人も含まれている。第三に、新古今時代以降では、後嵯峨院・伏見院、後宇多院の歌壇に属する歌人がほぼ満遍なく採られ、以後、『新続古今集』収載歌人にまで及んでいる。

これが『資賢集』収載歌人の主な動向であるが、この点から『資賢集』の性格に一言すれば、「『今』の歌よりは『古』を重くし、新古今集以後の著名歌人を尽している」（『和歌文学大辞典』）『新続古今集』の性格に通ずる側面を有しているといえようか。

#### 四

それでは、『資賢集』の成立時期はいつであろうか。この点については前述のことく、「『資賢集』解題」が、本集を原本とみた場合は江戸初期、写本とみた場合は上限を室町中期まで引きあげ得ると言及しているが、いずれにせよ、『資賢集』収載歌の最新の出典資料が『題林愚抄』であるから、『題林愚抄』の成立時期を示唆するには、『資賢集』収載歌の最新の歌、（例）まごも草木葉の露も五月雨にまさる水野・あやめ引也

（曳菖蒲・責任・五九七）

（浦五月雨・重賢・六三〇）

（浦五月雨・重賢・六三〇）の二首で、『題林愚抄』の集付によれば、（例）は「文安三七廿一内続書」、（例）が「伏見殿十首」であるから、まず、（例）の歌から文安三年七月二十二日以降の成立であることは動くまい。一方、（例）の「伏見

殿千首」の成立については、工藤進思郎氏が「『夢の通ひ路物語』の成立追考」（『岡山大学法文学部学術紀要』第四〇号、昭和54.12）で、「文明十五年（一四八三）まで引き下げておく方が」「より穏当な見解であるよう思われる」と言及されたが、私は、『題林愚抄』を出典資料にして成った私撰集『光俊集』の奥書に、「文明二（庚寅年）卯月上旬 西槐藤臣 判」とある記事からみて、『題林愚抄』は文明二年ごろまでには成立していただろうと推定している。したがって、『資賢集』の成立時期の上限は、文明二年ごろとみなして支障はないのではないかろうか。

なお、『資賢集』が書陵部に一本しか伝存せず、しかも、諸般の条件からみて原本の可能性があるとの見解については、「表紙裏の紙の『校合号』といふ文字<sup>(1)</sup>があること、詠歌作者のみ記して歌を欠落していること（例の歌を推定した五五八）、また、一四三三の三行としをおしめは身にもとまるかと思ひいれてやけふを過ましの歌に付されている「前ニアリ」の肩注からみて、写本と考慮するのが穏当であるよう思われる。なぜなら、三首前（一四三〇）に掲出済みの効の歌を、もし編者であるならば、三首後に掲載するというようなら、まは繰り返さないだらうし、それがもし重出歌だと判明すれば、不掲載の処置ですむはずであるからである。

ともあれ、『資賢集』が原本であるか、写本であるかは、さらに今後の検討に委ねなければならない問題であろうが、いずれにせよ、本集が『資賢集』の原形態を忠実に伝えていくことだけは確言できよう。となると、『資賢集』なる集名は編者その人による命名といふことになろう。

それでは、本集は何故『資賢集』と命名されたのであらうか。この点については、本集に、

正月七日、人きて、すけかたに、わかな歌よめるにやと

いひければ

（抄）里人は入日をかけて春の日に雪まのわかなつみかへる也

（七四）

の、資賢を作者と考えられる一首と、

人さそひきて、きた山へ花見にまかりけるに、所々の花さ  
かりなるをみて 資賢

（抄）遠けれと花のためにそ春はきぬけふは山路に日をやくらさん

（一三三六）

（抄）おもひやるかたこそなけれおさふれとつゝむ人めにあまるなみ  
たは（恋恋を・資賢朝臣・二二五六）

の計三首が収載されていることと関連があるのかも知れない。とく

に、（抄）と（抄）は表（3）で示した『資賢集』収載歌のなかの唯一の出典不明歌であり、集名と何らかの関係があるよう推定されるが、（抄）の

歌も集名付与の問題を示唆しているように思われる。というのは、

（抄）は『題林愚抄』収載歌だが、この一首のみ『題林愚抄』の和歌

配列順序を破って、巻末に配置されているからである。この配置は

恐らく、編者の意図によるものと考慮され、したがって、巻末の詠

歌作者の名をもつて、編者は本集に『資賢集』なる集名を付したの

ではなかろうか。そして、『資賢集』なる集名は、春部巻頭の一行

に「按察使大納言資賢朝臣撰集」とある記述が意味するように、私

家集の謂ではなく、私撰集を意味している。この点、『光俊集』の

奥書に、「右此一冊者先哲詠吟以所光俊朝臣心用粗集之云々」とあ

る記述から、私は、『光俊集』を、『光俊集』の編者が光俊の立場に立って撰集したと推定したが、この『光俊集』の撰集と軌を一にするよう思われる。つまり、『資賢集』は、『資賢集』の編者が源資賢の立場に立って撰集した私撰集ということになるものであるまい。

それでは、何故、かかる『千載集』初出の歌人の名を冠した私撰集を撰集する必要があつたのであらうか。まず、千載歌人・源資賢の立場に立つて編者が『資賢集』を撰集したことの意味は、たとえば、「この集で頼政や俊恵を多数撰入した意識と通ずるように見受けられ」、その歌林苑歌人たちの最重視していた詠歌態度が、「哥は題の心をよく心得べきなり」ということと、「歌はたゞ同じ詞なれども、統けがら、いひがらにてよくもあしくも聞ゆるなり」ということであつた点と関連があるよう思われる。これは、いわば題詠歌をよくうえでの心構えであるから、この点から当面の問題に言及すれば、題詠歌をいかに上手によむかという認識がかなり意識され始めた時期の歌人（この場合資賢）の立場に立つて、一種の題詠歌の手本たるべき撰集を企図した結果が、『資賢集』の編纂だったといえるのではなかろうか。『資賢集』収載歌人のなかで、歌林苑歌人の次に新古今歌人の多いこと、『古今六帖』収載歌人の多いこと、後嵯峨院歌壇に属した歌人から以降の歌人が多いことなど、いずれも題詠歌の観点から説明し得るし、何よりも、本居宣長をして、『排蘆小舟』で「初心の人題詠のよみ方おほつかなくて困ることあり。それには題林愚抄といふものがよきなり」（日本歌学大系本）といわしめた『題林愚抄』からの抄出歌を『資賢集』が最大の出典源にしているのも、この点を裏付けるものであろう。

そして、これらの題詠歌の手本をもって『資賢集』を撰集したことの意味は、私家集名を冠する私撰集のほとんどが詠歌作者名を注記していないのに、『資賢集』は詠歌作者名を注記していること、また、『曾丹集』を出典資料としている次の、  
 (3) かまひすくすたきし虫をいとひしに今はあらしの音そはけしき  
 (4) 露はかり袖たもぬれす神無月もみちは雨とふりにけれとも  
 (5) 外山なる柴の立枝にふくかせのをときく時は冬そものうき  
 (6) 三室山木葉ふりにし朝よりあらはにみゆる四方の玉かき  
 (7) (このは・一二一八)  
 (8) (風・一二一七)  
 (9) (このは・一二一八)  
 (10) 「『資賢集解題』では、395・714も該当例としているが、この二首は前者が『頬政集』、後者が『曾丹集』を出典資料としているので省略に従つた。  
 (11) 「『資賢集解題』の「出典」の章の調査結果を訂正させていた  
 (12) 6 から引用。  
 (13) 「『資賢集』解題」の「出典」の章の調査結果を訂正させていた  
 (14) 6 から引用。  
 (15) 「『資賢集』解題」を「題林愚抄」と改め、395を「頬政」、558  
 (16) 734・959・1469・1858・1880・2156を「題林愚抄」、714を「好忠集」、777を  
 (17) 「俊惠集」、1170・1177・1775を「六帖」へそれぞれ入れ、360を「統古今  
 (18) 集」とする。  
 (19) (8) 歌番号は158・313・328・346・418・913・922・1028  
 (20) 5首、頗阿・為定・為重・御製(不明)1首。  
 (21) (9) 「『資賢集』解題」と『資賢集作者索引』を参考させていただいた。  
 (22) (10) 拙稿「松平文庫所蔵『光俊集』の成立」(『国語国文』昭和52  
 (23) 3) 参看。  
 (24) (11) 「『資賢集』解題」から引用。  
 (25) (12) 注10に同じ。  
 (26) (13) 注11に同じ。  
 (27) (14) 日本古典文学大系『歌論集』能楽論集所収の『無名抄』から引  
 (28) 用。なお、島津忠夫氏「後鳥羽院歌壇と歌林苑」(『国文学』昭和55・

注

(1) 「中世私撰集解題(その二)」(『和歌文学研究』第十五号)から引

(2) 拙稿「和歌題林愚抄」から『明題和歌全集』へ(『花園大学研究紀要』第十号、昭和54・3)参看。

(3) 勅撰集からの引用はすべて国歌大觀本による。

(4) 『図書叢書』資賢集 遺塵和歌集所収の「『資賢集』解題」を意味する。

(5) 「『資賢集解題』では、395・714も該当例としているが、この二首は前者が『頬政集』、後者が『曾丹集』を出典資料としているので省略に従つた。

(6) 国立国会図書館所蔵の元禄五年板行の『題林愚抄』(1701・8  
 (7) 6) から引用。

(7) 「『資賢集』解題」の「出典」の章の調査結果を訂正させていた  
 (8) だくと、まず、「明題」を「題林愚抄」と改め、395を「頬政」、558  
 (9) 734・959・1469・1858・1880・2156を「題林愚抄」、714を「好忠集」、777を  
 (10) 「俊惠集」、1170・1177・1775を「六帖」へそれぞれ入れ、360を「統古今  
 (11) 集」とする。

(8) 歌番号は158・313・328・346・418・913・922・1028  
 (9) 5首、頗阿・為定・為重・御製(不明)1首。  
 (10) (9) 「『資賢集』解題」と『資賢集作者索引』を参考させていただいた。

(11) (10) 拙稿「松平文庫所蔵『光俊集』の成立」(『国語国文』昭和52  
 (12) 3) 参看。

(13) (11) 「『資賢集』解題」から引用。

(14) (12) 注10に同じ。

(15) (13) 注11に同じ。

(16) (14) 日本古典文学大系『歌論集』能楽論集所収の『無名抄』から引  
 (17) 用。なお、島津忠夫氏「後鳥羽院歌壇と歌林苑」(『国文学』昭和55・

9) 参看。

- (15) 同種の私撰集では、伊達文庫所蔵『邦高集』に全歌ではないが、かなりの作者注記がみえる。
- (16) 「『資賢集』解題」にこの旨の御指摘がある。
- (17) 注11に同じ。
- (18) 井上宗雄氏「南北朝・室町時代の和歌」(『講座日本文学6』昭

和44・1) から引用。

〔付記〕 本稿をなすにあたって、多大の学恩を蒙った『図寮寮叢刊 資賢集 遺墨和歌集』の編集にあたられた、宮内厅書陵部の関係各位に深謝申しあげる。